WASON
HQ
1104
J74+

驛遞局認可

July 2[illegible] 1886 no.30

明治十九年七月二十五日發行

每月三回發兌
一冊正價五錢
一ヶ月十五錢

女學雜誌

第三十號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第三拾號目次

●社説　婦言用ゆ可らざる乎
●叢話　妻の誠よく夫を改めし事、附り、悋氣嫉妬の事○唱歌聲論第二○日本婚姻風俗集第六○夫婦の心得第二○家政必覺（飯を甘く炊く法、食物を腐らさぬ法、蜂にさゝれたる時、ランプの口をつぐ法、たむしの療治）○西洋禮式第十食事の禮
●論説　世の良人たる者に望む（中島俊子）
●佳傳　江口の白妙珠玉を沈る話○モニカの傳○梅香女史の傳
●寄書　夏の夜の詩○祝文
●新報　十九則

●珊瑚の玉　（八）

●大和歌の道はたゞまことすくなくあだなるすさみばかりと思ふ人もやあらん日の本の國にあまのいはとひらけしときよりのかみたちのかぐらのことばを初めて世ををさめものをやはらぐるなかだちとありにける（いざよいの日記）

●家居のつぎ〳〵しくあらまほしきこそかりのやどりとは思へど興あるものなれよき人ののどやかに住みなしたる所はさし入たる月の色もひときはしみ〳〵と見ゆるぞかしいまめかしくきらゝかならねど木立ものふりてわざとならぬ庭の草も心あるさまにすのこすいがいのたよりおかしくうちある調度もむかしおぼえてやすらかなるこそ心にくしと見ゆれ（つれ〴〵ぐさ）

甲。ほとゝきす鳴つる方をなかむれはたゝありあけの月そのこれる（左大臣）

乙。みし夢をあふ夜ありやと歎くまにめさへ合でそころもへにける（光源氏）

A. Hototogisu nakitsuru kata wo, nagamure ba;
Tada ariake no, Tsuki zo nokokoreru.

B. I Had a dream, a dream so sweet,
Ah! would that I could dream again!
Alas, no sleep these eyes will greet,
And so I strive to dream in vain!

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第參拾號 明治十九年七月廿五日

● 社説

○婦言用ゆ可らざる乎

むかし文明年代の頃京極持清と云へる人あり其親戚に多賀豊後守高忠と云へる武士ありしを用ひて京都の奉行となさんとせしに高忠の申すやうハ暫らく御請を待ち玉はれ歸宅の上妻に計かりてともかくの答申上んと云ふをきくもの口を掩ふて笑ハざるハなし高忠歸りて妻に語るやう持清けふ吾に命じて都の奉行たらしめんとす之を肯ふべきや否や妻申すやう何とて肯ひ玉ハざる高忠の云く之を肯ふもあハざるも正に汝の心にあり妻あやしミて問ふ何如なる譯に候ぞ高忠曰く今日よりのち汝一言と雖も外事に喙を容るゝなくバ吾此職をうくべしと妻ハ決して申さじとちかひけれバさてハ御請をして奉行となり數多の功績ありて今に其名をとゞめたり然るに支那戰國のころ楚王優孟と云へるものを擧て宰相とせんとするに孟が云ふ請ふ歸りて婦とハからんと三日にして復び朝し答ふらく吾婦慎んで相たるなかれと申す敢て此の命を辭ひ奉らんと云ふきくもの啞然として笑ハざるなし一議するもの云く高忠ハよく婦言を退けて偉勳あり優孟ハ其婦にまよハされて天下の嘲りをまねけり大丈夫たるもの宜しく婦言を退くべし婦人の口に蜜ありゆゑによく腹中の刄をかくす然れども若し之を用ゐるときハ事として破れざるなく家として亂れざるなしと此れ從來孔子の道を奉ずる先生達の常に書に論じ口に敎えたる忠告なり

婦言果して用ゆ可らざる乎そも何れ故に之を用ゆ可らざる儒者先生の輩ぞ言ふ天子もし婦言をきかバ天下亂る主人婦言をきかバ一家みだるとろの婦人女子を見る恰かも惡魔の如く其の婦言を見るあたかも流行病の源の如し一度び之にふるゝときハ人として迷ハざるハなく天下の廣きも乍ちにして大亂するとせり故に云く殷の紂王が天下を失ひ鹿臺にて焚死せしハ妲妃の言を用ひしゆゑなり晉の獻公が恭太子を殺し國中大亂に及びたるも夜半に驪姫の言を用ひしゆゑなり夏の桀王が妹喜に於ける衛の靈侯が南子に於ける夫差が西施に於ける唐高が武氏に於ける明皇が貴妃に於けるみな婦言を用ひしゆゑに其天下を失へりと大凡そ國家の敗亂する一に婦人女子の罪によらざるハなしと思へり左れば支那日本の歴史を觀るに今日女謁盛んなれば明日ハ直ちに天下亂るとなし昨日閨房亂るゝとあれバ今日ハ既に國家を滅せりと思ふ是一汎の公論なり此故に一家の主人もし其婦に相談

するト云ハヾ扶甲斐なき男といやしまれ一軒の商人もし其家にかへりて考ると云ハヾ早くも鼻下長の嘲をまねく赤穗四十七士ハ女に大事を洩さゞりしゆゑ敵の首をとり得たりと思はれ天河屋義兵衛ハ妻を出して獨り働けバこそ男であるとほめらるゝ嗚呼女子婦人ハかくも果敢なくかくも卑しまるべきものなりや婦女は果して惡魔なりや婦言ハ果して流行病の源なりや吾人ハ憤然として世人が吾姉妹を輕ろんぜるの太甚しきを誡めざる可らず

然れども退いて窃かに考ふるときハ婦言用ゆ可らずとするの教また一應の理なきにあらざるも婦女ハ決して惡魔にあらず其夫をいさめ夫に教ゆるの言何條夫にあしかれとて申すとならんや必ずしも之を愛し之を助けんと思ふよりの眞心なるよしハ吾人も確かに承知し實際を知るものハ亦必ず同意する所なるべしと雖も何如にせん女にハ書物をよまぜ可らず女にハ智惠淺くして無下に愚かなるやう教るをよしと云ふ從來一汎のならひなりしかバ斯る教育をうけたる婦女の言ふところに何如で事に宜しく行ひに用ゆべき名言あらんや敵と擊んとする夫にむかひてお前のみ出世して子を可愛ゆくは思ハぜやと怨じ敵陣に打行んとする夫を止めて今夜一夜の御看病ハ左程あしくハあるまじなど申すこと必竟夫を思ふよりの言葉なるとハ勿論なりと雖も其才識の足らざるより知らず識らず之をして下等の覺悟を持たそやう取扱ふに至るは女流の爲め甚だなげくべき極なり此故に婦言用ゆ可らずとの一言は女にとりて此上なき失敬な教なりとは云へ事の實際を見れバ必しも無理非道なる教にもあらず必竟ハ女の智惠の足らざるゆゑにして女の智慧の足らざるも其教育の十分ならざるが故と云ハざる可らず

婦人女子にして若し相應の教育を受け男子の思ふ所を思ひ男子の考ふることを考え得る程の才識あらんかその夫に對して忠告する言の葉ハ一々夫の足らざる所を補ひ得べし夫が心配の半バをうけて之を共に心配し夫の計畫せる事業の半を助けて之に二倍の事を爲さしむるなんど夫の益となると甚ど多かるべし歐米の開化國に於て妻が夫に於ける實に此れなりかゝる所に於て婦言用ゆべきか用ゆ可らざる乎なんど言へる愚かしき教ハ一人として心にだも止めざるべきを茲にハ女子教育の盛んならざるより女流の品格を落し婦女ハ到底男子に並ぶべき人間にあらずと見做されて其言葉ハ一切用ゆべからずなどの教あるに至りしと吾人の大に慷慨するところなり試みに見よかゝる教ありし吾國にすら古來夫を助けて其志を成させたるもの〻尠からぬとハ本誌の

佳傳中に屢ば掲げ載して其行を賞賛したるもの丶多きに由りて知らるべく支那にも唐の太宗の長孫皇后に別れてより内助の大益を失ひ玉へりと云ひ秦の符堅は夫人の言を用ひずして泗水に敗れ明の寧王も亦た婦言を用ひざりしより王陽明に伐れたるなど婦言の用ひて功あるべかりし趣亦少からず此故に婦言の用ゆべきと用ゆべからざるとは一に其婦人の才識何如に關す而して婦人の才識何如と一々其人の教育の有無に由る謹んで告ぐ吾が同胞の姉妹諸子君等婦言用ゆ可らずの一言を早く除き去らんとするの慷慨あらざる乎君等が尤も敬愛し玉ふべき夫兄の思を思ひろの喜憂を喜憂し一に相ひ助けて共に其言を用ゆるの樂地に進むとを希望し玉はざる乎吾人思ふに諸君は固より此に慷慨し此に希望するの人なり然らば則ち自ら學を勵とめて其才識と增し其娘孃と教育して彼等の才識を增させざる可らざる也

●叢話

○妻は誠よく夫と改めし事

附り、悋氣嫉妬は説

孔子の教に七去と云ふとあり妻と去る程の不都合七つありと申ぞとにて其が一つに妬あれば去ると云へるあり妻もし悋氣嫉妬せば之を去るべしとなりろもく悋氣嫉妬なるものは固より惡德にして決してほむべきものにあらざるは言ふまでもなしと雖どもよく人情の奥を考へ婦女の心の中を思へばあながちに責むべきとのみにはあらざるが如し事の由緣を尋ぬるに悋氣嫉妬も半ばは夫を愛ずるの念より來り半は夫を信ぜざるの誤より起る也故に全く此心なきも非常に夫を信ずるか又は夫を愛するの愛なきものなり亦た此の心非常にして落語家の所云る眞黒燒なるものも其夫を愛するの念よりも寧ろ全く夫を信ぜざるの心多き人なるべし故に夫の人物を信じて露計りも此心なきを第一流の妻とし半ば夫を信じ半ば此心の掛念ある如きと第二流とし夫の爲すにまかせて少かも此心なきは夫を思ひ夫を愛せるの妻にあらずと云ふべし但し此は夫に惡じき品行なかりしときに付て言ふのみ若し實際夫の不身持あらんときは妻たるものに此心あらんと勿論は人情なるべしと思はる

蓋し夫品行をやぶりて他女に通ふ如きとあらば妻たるもの斷然離緣を申出して自ら去らんとを求むるの權あり西洋には如此きと一汎の習ひなれども更に宜しきは夫をして其品行と改めさせるやう取扱ふとにあり特に我國今日の有樣について言はゞ妻たるもの宜しく忍耐して夫を諫め夫の行の速に改るやうもてなすべ

きなり斯て此際に至り妻の人情として多少の悋氣あらんと発る可らず吾人また強ちに之をおしゝとハ言ハぜたゞ之を俗に嫉妬と云ふ程の甚しきに至らせ亦た事々に之を外にあらハす等ハ宜しからぬと思ふ必ずや其夫をして品行を改めしめんが為に心配する程にとゞまるべき也」むかしある男その妻に心ざしうすらぎめづらしき女をよびいれて淺からずちぎりたり此妻いさゝかも心にかけず又うらみたるけしきもなく日數ふるまゝに秋の夜のながきにいとゞねられもせずともし火をかゝげ傾き居るところに鹿の音かすかにきこえければ

我もしかなきてぞ人に戀られし今こそよそにこえはきけども

と忍び聲に詠じけるをかの男きゝて限りなくあハれに覺えて今の女をバ出しやりけり。又たある男よなく〱出でゆきて他妻のもとに通ふに家の妻いさゝかも顔つきせず早く出るも晩く歸るもちとの怨める景色なければ吾が居らざるまに密か夫などあるゆえにやと疑ハれ例の如く出るさまにして小戻りし庭の小草をかげとしてうかゞへバ妻は夜深きまで寢もねやらず夫の出で行しかたをうちながめ軒端に近くさす月にわが影をのみ伽にして物さびしげに琴ひきよせ

風ふかばおきつしら波立田山夜半にやきみがひとりゆくらん

と歌ふをきゝてハ夫の心ハりさくるやうなりて思ハず躍り入り妻をいだきて其行のあしかりしを悔ひたりとぞなべて人ハ妻たらんもの若し悋氣あらバ此兩女の如くもてなし玉へ其心に夫を愛するハ誠しあらバ何如なる夫の不品行も遂には改るもの也

〇エミルツン氏唱歌聲論抄譯　（第二）

左の練習を毎日數分間づゝ數回行ふべし

先づ姿勢を方直にし（頑硬なるべからず）下顎を少く上げ双肩を後方に寄せ双手を体の前面或ハ後面にて輕く組み咽喉及び胸部の諸筋肉は務めて安泰の位置に置き肩及び腕の重量に由て胸部の昇降を妨ぐるとなきを要す

斯の如く充分に注意して後口腔を可成細小にし徐々に吸息して全く肺臓を充たし一時吸息を止め再び徐々に呼息すべし此の如く反覆數回すると可とす然れ雖一回毎に暫時休息すべし此練習を爲す時として眩暈を來すとあれ共靜かに頭を振る時ハ直ちに平愈するものなり

右の練習を終りたる後暫時休息し再び肺臓を充たし充實堅固なる音聲を以て大音に凡そ十個の數（一二三四五等の如く）を呼算すべし但し一個を呼算する毎に少量ハ氣息を取るを可とす此の如く數回して後肺臓を其極度に充たし十個乃至十五個

と漸次個數を増加し一息（前の如く個毎よ氣息を取るべからず）にて續く限り呼氣すべし然れども余り過度に失せざる様注意すべし

以上練習の目的は唱歌する際に氣息を自在に使用せんが爲也

横膜を强健にし且つ發達せしむるために

指頭を水落のところに中て内部に壓迫すると同時に肺臓より空氣を吐出すべし斯の如く數回反覆したる後は呼吸せずに唯横膜自身の働きを以て内部に收縮せしむることを練習すべし

腰筋を發達せしむるために

充分に吸息したる後指節を腰の兩側に於る筋肉の上に置き出來るたけ壓縮して同時に徐々氣息を吐出すべし。但し數回反覆するを可とそ

腹筋を働かしむるために

指頭を水落の少しく下に中て反覆壓縮すべし

胸部を發達せしむるために

兩腕を强く体の前後に振動し或は又胸部を撫つゝ吸息するが如き何れも適當の方法とす

前述諸練習の總ては甚だ有益なるものにして日々練習する時は唱歌は進歩を望む者に對して著しき利益を與ふるものなり而して此等諸練習の價値が其音聲上に及ぼす影響は兎も角も實に健康の本原健康の方便と云ふも過賞にあらざるなり故に早晩呼吸法の規則立ちたる一科は我地方（米國を指す）の如き他病に比して死者の數最も多き肺病の豫防及び療治の爲めに盛に行はるべき時の來るは記者の確信するところなり（未完）

○日本婚禮風俗集（六）

○武州北多摩郡田無村邊にて維新前迄は新婦の來るとき男の家にては普代の從僕に松明を持たしめ之に火を点し門前に交叉し新婦來れば之を右左に開き通過すれば又交叉して燃し盡すに至る今日も尚ほ往々之を爲す者ありと云ふ之れ新婦は火中に入り其歸路を絶つものなりと（川勝源二君）

○島根縣石見國美濃郡邊にては新婦の來るとき若者仲間相集り之を祝せんとて大なる島台を作り數十人して之をかつぎ勇ましき囃子となし婚家に至り島台を新夫婦の前に置き若者頭音頭となし高砂又は他の祝辭を異口同音に歌ひ婚家よりは酒肴を贈り之を謝す然しもし平生惡まるゝときは若者等石地藏石塔等を婚禮の席にかつぎ込み又た石を投ずるなどの事あり此れ維新后數年は行はれたれど今は全くなしと云ふ（和崎義路君）

○越后古志郡新町村邊にては新郎又は新婦が父母の家を去る時

ハ到るべき家が何如程近所にても必ず草鞋にて行くとなり亦此婚禮に列なる人々も必ず草鞋を用ゆ婚姻は冬より春へ掛け大抵降雪ハ季候にして仕事の隙なる時に多し若者小供等は雪を圓めて新婦及び付添の人々に投付る雪なきときハ泥を取て之に投ぐ或ハ陥穽などを堀りて道に障碍を造る等の事あり右は十四五年前なり悪まれて居る者は此時ひどき目に逢ふ村内の婦女子等ハ式を觀んとて婚家に到り障子に舌にて穴をあけのぞき見るまた其家にてハ見物に來れる人々を内へ引入んとす見物人ハ引込まれまいとなしわざ〳〵隠して見るをよしとす婚家にてハ見物人等がのぞいて居る所へ酒肴を出して饗應す中等以上ハ家へハ村の若ひ衆が異形ハ身裝をなし入り込む假令へバ席を着さんだわらを被ぶりなどするの類亦高砂の謡にいでたちて踊り込むとあり之を一ハカと云ふ大勢の來るを名譽とぞ(池田作二郎君)

○夫婦の心得(第二回)

甲。貴婦人よりの投書

○○第四夫他出し玉ふときハ心をこめて其歸を待つこともとよりに候へども何處に行き玉ふやまた何如なる用向にて出で玉ふや少かも其樣子を承はらざれバ自ら御歸りをまづ心も深からず眞に恐れ入ることに候前号(第三)に御注意被下候とハくれ〴〵も妾等ハ守るべきとならんが殿方にもなるべく其出で行き玉ふ場所と用向と何時比に歸り玉ふとの由を令閨に知らし玉ふやう願ふ左あるときハ女の狹き心にも夫と同樣に其事を案じ其事の恙なきやう家に居て祈りくらし且つ御歸りを喜びて待ちうくるやに相成りいもせの睦みも深うならんかと考へ候

○○第五　妾は久しく學校に在りて少の文學を修め候ひしが夫に嫁してより家事忙はしく朝夕の煮たきふき掃除のみに一日を送りて學びたる事を用ゆる場所もあらず眞に怨めしく存じ候成べくハ夫と共に机を列べ切ては夫の物し玉ふ書どもの寫しなはしなりとも試みなバ何如に樂しく互の愛も深うならんかと思ハれ候今たゞちに斯る事の爲しがたきは必竟互に財産もなきに余り早う婚姻したるよりの誤にぞ候ハんが夫も其心して妾に文事をとらするやうありたく左あらバ此上なき樂あらんと覺え候

○○第六夫ある婦へ男より文を送るとハ成べく避けたし何時も其夫へ送るべし若又直に彼婦へ送らんとならバ(かの夫不在のときなど)妻君と連名にしてか又は妻君の手より送るやう致したし妾ハ斯る心得ば双方の夫婦間に掛念を少からしむる数ならんと存じ候

乙。紳士よりの投書

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○第七朋友又は用事向の人と談話するとき傍より口を出す妻ハ尤もみにくし必竟妻ハ夫の身を心配し口を容るゝとならんが之が爲め用事向に大なる不都合を來し先方をしていろ〱の掛念を起さするとあり如此きとハ妻たるものゝ爲すまじきとゝ也

○○第八僕ハ友人の事を悉く細君に談じきかするゆゑ其友人初て吾宅に來りたるときハ細君すでに知已の如く思ひいとなれなれしくもてなすより朋友の方にて斯らバ彼事此事も細君に談ぜしならんなど思ひ其後は僕にも打明けざると多くなれり因て僕ハ細君に戒しめ初對面の人ハたとひ久しく僕の朋友なりしとも御名前は承り居りました主人が色々御世話になりまする程の挨拶止りいと嚴肅にあらするやう命したり

○万國婦人禁酒會の事

彼のレビット夫人をして全世界を一週せしめ禁酒の主義を擴張するとに盡力する万國婦人禁酒會なる者ハ明治七年の頃初て開會したるものなるに十三四年の間に既に五千の部會二十万の會員あるに至れると尤も歎服すべき事業と云ふべし其會則の目的とするものを見るに同會ハ輿論をして禁酒を賛成せしめ少年を教練し大酒者を救濟し禁酒律の實施を望み酒商を全く滅するにありと云へり而して此目的を達するにハ或ハ新聞雜誌書籍を發行し若くは勸取褒賞の文を募りなどして禁酒論を主張し或ハ集會に演説講談に此を主張し種々の遊會を設けて無酒宴の樂みを示しなどし到底此論の賛成者を多くし万國の婦人連名して禁酒法律の實施されんとを各國の天皇大統領へ同時に請願せんとするにあり會員の精神偉なりと云ふべし此故にレビット夫人の如き一昨年十一月米港を離れてよりサンドウイッチ諸島に渡り亦アウストラリア洲に入りて所々に演説し同志の婦人を募り我國に來られても亦同樣に奔走盡力あり特に當地にては諸人の好待あつく見る所の人として其風采に服せざるなけれバ所々より連りに其演説を乞ひ一日に五回講壇に登られたる程の事もありと云へり我國同胞の姉妹諸子幸にして同夫人の風采を親覽せる者は固より之を傳聞する所の人も皆共に興奮せざる可らず同夫人今すでに去ると雖も志を同する姉妹等ハ我府下に婦人禁酒會を設けんとに盡力さるゝぞやに遠からずして其設置を見るに至るべし本誌愛讀の諸子亦た希くは應分の力を供して此會の爲に盡す所あれ此會は諸子の夫をして品行を清くし心身を丈夫にせしむるものなり諸子の愛兒をして無病強健に生長せしむるものなり諸子が婦人の協會として盡力すべきの地盖し如此き主義の集會を以て尤も可なるの處とすべきなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○家政心おぼへ

暑中食物を貯ふる法

食物を乾きたる布につゝみて木炭を粉にしたるものゝ中に入れをくべし永く腐ることなし魚類ハ腸を出し炭の粉とつめとくべし羊の肉などハ酢にひたしたる布をもて拭ひ濕氣なき窖に入れとくべし又鮎ハ壺に生漉を入れ其中にひたしをくも可なり

飯を甘く炊く新法

ときたる米を釜に入れ通常の如く水加減を爲し釜の口に余るほどの大さある厚紙をもて口を掩ひ(この紙は一度用ひたるのち乾しをきて後日再び用ゆ)其上に釜の蓋をして火を焚き付け既に煮え立ちて一度湯氣を吹きたらバ直に火を去り暫時そのまゝになしをくべし斯するときハ其飯フックリとして味よく且つ薪も省けて至極便利なり

ランプの口をつぐる法

石膏と云ふを藥屋に行きて求め之と水にて捏ね堅き糊の如くしてランプハ口に塗りつけ金具をはめ付け漏れ出でたるを拭ひ去り暫く置くときは丈夫につくべし一錢も買ひたらバ五つ六つのランプをつぎ得べし

蜂に刺されたる時

蜂などのさしたるときハ直に塩を塗り綿布をもて纏ひをくべし或ハ重炭酸剝篤斯をうるほし塩に代用する法もあり共に試みて可なり

たむしの療治

煙草をよく煎じ中に少し許の酢と灰汁とを加へ之にて度々洗ふべし或は亦た一匙斗りの酢に少許の烟硝を加へ一二時間置たるのち此汁をもつて屡バ洗ふもよろし

○西洋禮式（第十）

食事の禮

二六。禁酒の人にあらずしてすゝめられたる酒を全くとらざるハ禮にあらず少しく之を杯に入れすゝめたる人の顔をながめて頭を少しく下げ杯を吻につくべし

二七。酒とのむ人も杯を全くのみほす可らず

二八。次の食物の何たるを知らざるは賢き事にあらず故に給仕人によくきゝ合せ置き好む者と好まざるとを知らして之を取るべし斯するときは食ハざるものを殘して主人の好意を失ふなどのうれひなかるべし

二九。サウスをとるときハ之を皿のさきにとるべし

三〇。通常の場合にハ主人自ら食物を分々客人に配ると宜しか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らせ寧ろ給仕をして持ちまハらせ客をして勝手にとらしむべし

三一。貴婦人食堂を去るときハ紳士立ち上りその出で去るまでハ座につくべからず

三二。給仕人ハ後菓子を出したるのち食堂を去るべし

三三。給仕人居合ハせざるとき貴婦人其席を立たんとせバ戸口に尤も近き紳士戸を開き貴婦人をして通行せしむべし

三四。貴婦人去りたるのち久しく食堂に止るハ主人の細君及び貴婦人の來客に對して合宜の禮にあらず特に顔を赤くし亂れたる風にて貴婦人の集るところに來るハ甚しき無禮なり凡そ高等の紳士たるものハ何事にも謹愼なるものなり

三五。饗應する人ハ饗應の手續と食卓上の禮儀とを心得ざる可らず たとひ自ら料理するに及バぬとも之を差圖し皿をとゝのへ給仕の仕方を指圖することなど緊要なり

三六。已の力かぎり客を饗應せることに注意しよくつとめざる可らず 朋友をまねきて饗應するは恰かもその人の幸福に關してもまた責任あるに似たれバ客ハ已が家の屋根の下にあらん限りかならずよく之をもてなすべし

●西洋婚姻談ハ女學隨筆をみなへしハ余白なきに付次号へ讓る

●論說

世の良人たるものに望む

中島俊子

物各其地位アリ地位アリテ而其任アリ任アリテ自ラ其責アリ而人間ノ役目或ハ職分ナル者ハ皆其地位ヨリ來ルモノナリ抑モ我邦一家ノ上ニ於テ妻君ノ役目タルモノハ殆ンド内處向ノ役目ノミニシテ少モ外表ニ向テノ役目ナキハ甚タ妻君ノ地位ヲ卑クメルノミナラズ大ニ爲メニ人間世界ノ愉快ヲ減殺スルモノト謂フ可キナリ

是ヲ以テ今ヤ妻君ヲシテ啻内處向キノ役目ノミニ止ルコナク相當外表ニ向テノ役目ヲ負擔セシム可シ（此ニ述ル處ノ外表ノ語ハ一家外ノ意ニアラズシテ矢張一家中ノ外表ナリ）責任ヲ負擔セシムルニハ其良人タルモノヽ心持ヲ一變セザレバ能ハザルナリ兎モ角今日ニ於テハ猶其良人タルモノハ幾分カ妻君ヨリ智識ヲ藏畜スルモノト謂ハザルヲ得サルナリ妻ノ夫ニ於ル猶赤兒ノ母親ニ於ル如キモノト謂フモ敢テ過言ニ非ルナリ依テ婦人ノ改良ト謂モ之ヲ婦人自ラ爲ス能ハズシテ男子之カ助ケヲ爲サヾレバ到底人々望ム處ノ文明ノ域ニ達スルヲ得ズ

世上一般ニ就テ之レヲ謂ヘバ或部分ハ然ラザルモ或部分ハ婦人ノ改良ヲ好マザルモノ非ズ隨テ其議論モ少カラザリシカ中ニハ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

妙論卓説モ頗ニ世ニ出テ隨分感服ス可キヿモ多シ然レﾄﾞモ唯嘆息ス可キハ妙議論ノ割リニ其實ノ進マザル是レナリ實ノ進マザルノミナラズ其妙議論ヲ世ニ吐出スル處ノ家ニ就テ之レヲ視ルニ敢テ議論ヲ吐出セサル未タ婦人ノ改良等ニ至リテハ聊カ心意ヲ用ザル處ノ家ニ比シテ大ニ其等差アルヲ覺ヘザルハ蓋シ其妙論ヲ吐出セシ時分ニハ已レ先ヅ進ンテ之レヲ爲サントノ思込ミアルモ中〻婦人ガ思ノ外鈍クシテ已レノ意ノ如クナラザル時ニハ忽チ妙論卓説モ一朝ノ霜ト散シ到底爲シ得可カラザルヿト自諦シ母親カ赤兒ヲ養育スル如キ忍耐ヲ永續スル能ハザルナリ是レ餘リ一時ニ薰風頓ニ生セシメ光輝忽チ映ゼシメント欲スルヨリ却テ爲シ能ハサルモノナラン

因テ以爲ヘラク最モ爲シ得可キ役目ヲ妻君ニ負擔セシメ素ヨリ之ヲ負擔スル以上ハ其責任モ單ニ妻君ノ身ノ上ニアリ一般ノ人情ニ就テ之レヲ考フレバ夫トシテ其妻ヲ愛セザルハナシ其愛スル處ノ妻ヲシテ不調法ノ名ヲ蒙ラシムルハ甚タ好マザルモノヨリ成ル可ク妻カ人前ニ出ルヲ嫌ヒ唯内處向キノ役目即チ食物ノ料理衣服ノ裁縫ノ如キモノヽミニ止マリ而其鹽梅ノ口ニ適セザルカ襟袖ノ身ニ應ゼザル時ニノミ其責ヲ受ルノミニシテ毫モ外表ノ役目ヲ勉メ外表ノ責ヲ蒙ル如キモノアラザルナリ而余ガ謂フ處ノ最モ爲シ得可キ役目トハ他ニ非ラザルナリ唯妻君ヲシテ一家ノ交際官タラシム可シト謂フニアリ

一例ヲ擧テ之レヲ言ヘバ客家ニ來ルアレバ妻君乃チ萬事之ヲ宜シキニ處シ其饗待ノ丁寧ナルト疎陋ナルトハ一ニ以テ之レヲ妻君ノ意ヨリ出ルモノト認定シ、爲メニ客ノ愉快ヲ感シテ之レヲ賞賛スルモ不滿ヲ抱テ之レヲ譏誚スルモ毫モ良人ノ與ル處ニ非ズシテ獨リ妻君ノ當リテ之カ毀譽ヲ受ク可キモノナリトシ客ノ待遇ニ至リテハ妻君自ラ之レヲ恣マヽニス可シト確言スルニ非ルナリ各其場合モアルモノナレバ時トシテハ之レヲ良人ニ相談スルハ最モ宜シカル可シ然レﾄﾞモ今日ノ如キ一般ノ有樣ヲ以テ言ヘバ煙草盆ヲ出スカラ茶菓ヲ供フル等ニ至ル迄殆ンド妻君一已ノ量見ニ出スシテ其良人ノ命令ノ下ニ出ルモノヽ如シ況ンヤ之ヨリ以上込ミ入リタル待遇ニ於テハ一トシテ良人ノ命令ナラザルハナシ起レデハ良人モ客ト談話ノ外ニ何トナク心ヲ用ヒ何カ客ニ對シテ欠乏ナルモノハアラザルカナド無益ノ心配ヲ要セザル可ラズ而妻君ハ一家内中ノ猶内向キノ役目故其來ル處ノ客ハ何人ナルカ又其席ノ都合ハ如何ナル有樣カ一切之レヲ知ル可ラサル故ヲ以テ宛モ盲人ノ演劇ヲ其樂聲ニテ窺フモノヽ如ク庖廚ノ一隅ニアリテ無益ノ心遣ヒナシト云フ可カラザルナリ客トナ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

リテモ唯一二ノ要用ノミ語リ去レバ足レリトナスモノハ何ノ感覺モアラザル可ケレドモ否ラズシテ平常ノ情誼ノ爲メニ來ルモノトセンカ唯冷談ニ良人ト對話スルノミニテハ何トナク突然明キ家ニデモ來ル思ヒヲ做シ一室内人間ノ温マリヲ欠クモノヽ如シ毫モ友情濃密間斷無限ノ歡樂ヲ得ル能ハザルナリ（未完）

● 佳傳

○江口の白妙珠玉を沈る話（續）

かくて廿日斗りの後かの寶物ども皆さぐり得たれば之をかの女と取かへに渡さんよし原繩の方より申越せり小太郎其旨を窓よりとゞづるゝに白妙ハ此時すでに寫して譬諭品に至り不覺不知不驚不怖の句にわたりて筆を閣き迷へバ法華を失ひ悟れバ法華を得る五字の題名八万の字に准ふなんぞ全部をうつすと期せんとて几上に留め置き外面のありさまを窺ひ見るに彼の親戚の某もよろづ胸いたゞよ打しめりてあるまへどもけつく小太郎ハ面色よろこばしく見ゆるぞなかなけれ白妙が出ると見で小太郎外の言ハなくかゝれば我も此所に一日もわらられんや同じ日に歸船を促さんと躍り走りて船の設けを其翌日は小太郎の行くべき船と白妙の乘べき船と共につなぎ用意ハやとゝのひたりわゝ江口

を出でしより穴と一つにそる迄も離れまじとの契淺からざりし交も今はあだとなり男の情とところへてハ果敢なきものぞ女なる白妙ハ船ばたに立出でゝ嫁具のもたせたるを抱き鑰をとり出して開けバ内に抽替あり先づ第一層とぬきとれバ内につゞりたる草紙三品あり之を小太郎に授け是ハさりにし歌よみの白妙が集めたる古今新集并に八重垣の私抄之れに記念にとゞめしを今又殿に奉るなり其外なるハ何ぞと問ふ白妙かぞへて云ふ太秦の午頭香、亜刺敢の雀脳香、奇南沈水香、數種、九華丹、絳雪丹、なに々共に是れ海上の仙藥世の珍とする所今留めて益なしと海中にざふと投入たり皆々あやしみて目を放たざ白妙第二層をひらけバ金條環、八寶器、珊瑚の枝、なんど寶玉の類數多し白妙收めて袱紗におしつゝむかと見れバ是も海中に投入たり艶なる女の船端に出てするとなれバ此時岸高きに人多く集り見て惜むべし〳〵と云ふも何の故のくそるとも知らざ第三層と引出して之をかゝへ乍ら原縄のありと云ふ船に向ひて罵るやう賤妾小太郎殿と里を出る容易の事にあらざ人の愛を貪り恩を割く仇人是れ死すとも忘れんや察するに彼の人ハ今公より求めらるゝ海賊の張本ならんさあらぞハ何如でかく速に寶物を求め出でんやかゝる人に身を托して下半世を送らんと思ひもよらぞ又小太郎どのと一生を送り得なんための用意をろそのならねど今ハ用なしみな棄て去るのみ嫁我箱の中に玉あれども情人の眼中に珠なし是皆妾が薄命ののびざる處ならん妾ハ殿に反のぞ殿こそ妾にそむけりとかこつ小太郎羞入て涙を流し白妙にむかひ過を謝せんとす白妙推ひらきて此時に至りて一旦彼船に參らで死るべきやハと寶を抱き乍ら船ばたに出でさらバ其船へ參らんと云ひ乍ら深き方に向つて跳り入たり船中急にすくハんとするとき白波わきかへりて影もなし思つめたる夫の心に情あさからば深き水の底もなほ身を終るにうちめしくぞありけん白妙が心のうちぞいとあハれなり

○アツガステンの母モニカの傳

モニカは日ごとに羅馬の天を望みわが愛子を道に來らせ玉へとの祈ハやむときなかりきアウガステンハ母を離れて群狼の中に入るに恰かも是れ温帯を去つて極地に至るが如し信切と美麗とは人のをもてに植はりて心の底に根を下さず滔々たる帝都の人みな心中の友にあらず此際重き病にかゝり知れる人死そるとき悔ひ改め教師と頼める人不品行に身を落すなど心を刺すとの多きうちに基督教の信徒は平和喜樂に世を送り品行清潔に交誼親切なれバ其等の爲にいたく感を起し數多の教書を研窮して大

に發明する所あり遂に大悔して敎に歸しミラソの會堂に於て洗禮を受けたり此れ必竟天父の大恵なりと雖もモニカが多年晝となく夜となく祈りくらしたるの愛ついに之を道に來らせたるなりけり當時アウガスチン美女二人を伴ひて帝都の公園に遊ぶ赫々たる天日、鬱乎たる叢樹、光を樹枝の間にもらして白線地に蹋し靜氣凉々風景言ふ可らずアウガステン二女を左右に置いて長大息しあゝ汝等今日今時此の身を昔日の人とする勿れ昨の樂む所ろ今ま全く吾を喜ばせず汝等ハ美貌亦たわれに美ならぞ宜しく之より去れと其のすがり慕をすてゝ丈夫一斷す恰も是れ海をへだつるアフリカの地にモニカが机の下にうづくまりて噫吾が全能の父願ふハわが愛子を道に來らせ父が御爲に働かせ玉へと祈りたる時なりけりアウガステンが豪爽の氣は之より謹正嚴直の質に變じ終身敎の爲に力を盡して古今に有名なる宣敎師とハなれり」此よりのちモニカも亦羅馬に來りアウガステン初め二三の友人相集り合宿する家の政を治め諸子をいつくしむと均しくみな已れの子の如くし共に敎の爲め貧民の爲に盡力せしめたりかくて再びアフリカに歸らんとぞるとき急かに肉体の病にかゝり早や今日此頃の有樣となれりある夜今まハ心も望も全く一となれるアウガステンを招き木葉しげる庭もせと眺めて共に夜の景色を賞ておが子よ今は心をくべきこともあらぞたゞ終まで道の爲め一身をゆだぬべしなど敎えさとし其后多くもたゝぬ間に其靈、体を離れて天に歸したりむかしアウガステンが母をあざむきてアフリカの海岸より出帆したるハ母の心に子と地獄へ渡す思ありけん今アウガステンは此世の岸邊にとゞまりて母をハるかの天國へ旅立せたれど其靈安らかに神のみもとに至ぬべしと思へバさきに母をくるませたる程の苦ハあらざりけりあゝアウガステンが基督敎に對する偉勳は世を終るまで賞めたゝへられんされバ此モニカの名ハ大凡ろ基督敎の傳れるべき土地のいづこにも傳はりて永く子を敎ゆる母の鑑となるべし

○梅香女史の傳　第十二

情雲れるゝ時
心月自らきよし

梅ハ初て會堂に入りて說敎ときくに敎の言葉一々己が心に徹して悟る所少からず凡ろ人の望を此世に置きて富貴利達の爲に奔走したゞ俗世の兎と得んとを欲ぞるときハ大道眞理の山何如に高とも目に入るといと稀れなり一旦落魂失望して現世の果敢なきを思へバ眞如の月さやけく澄ミて情欲の雲もちるものとぞ梅が此時に至りて初て敎に傾きたるまた此ゆえならん聽聞の際ゝまたゝび歎息して吐息つくと屢バなれバ彼の二人三人居たる

洋婦人のうち年老ひて最と信切に見ゆるが特更に梅の有樣に心をとめて說敎終るのちかにかくと言ひなぐさめ已ハ築地の某と云へる處に住へバ此よりハ是非御話に來り玉へなどいと自由に此國の語とつかひてなぐさめされバ其後梅ハ二三度往來して親しみも自ら深うなれバ此頃は心ときなく何事とも問ひ試むる交となれり今日はかの洋婦人梅を誘ひ又一人の女生徒とも伴ひて上野の公園に遊び木立物ふりたり影にやすらひてくさ〳〵の話するうち洋婦人はひたすら梅の心を敎の道に傾かせんと勉めければ談話のそゞも亦自づと其道に入りにけり

(梅)ソウ致しますると此の敎の大主意とする所ハ何如なるとで御座いませう(洋)左樣です人間にハ皆な罪と云ふものがありますドンナ賢ひ人また正しひ人と世間で云ハれまする人ももしよく其行を考へましたら決して心に一点も愧もないと云ふはありますまい然らば此罪には必ず罰のあるべき筈ですから人間は何樣の君子正人と名あるものでもまた不正不義の人ハもとよりですが皆な此罰を受ねバなりません左樣しますればバ此世の中はみな罰の苦を受る者斗り居まして樂しきとては一つもありますまい又それのみならず何時まで立ちましても到底正義の人行に一点の汚もなきと云ふ如き罪なき人は出來ますまいそれゆゑ神さまは耶蘇基督と云ふを世ゑ下して其御功により人間の罪をそくひまた万人の敎を立て人々もし之にたよらバ啻に罪をゆるされて罰より逃れ此世とたのしく送り得るやうに成りまするのみか心の中に淸き泉を與へられて善き行善き心得の水ながれ出で遂はに純全なる正人君子となられ得るやうなされたることですソレユヘ基督敎を信ずると云つて外の事ではありません先づ第一に自分に罪あることを悟り次に此罪をそくひ玉ふハ耶蘇基督の外にあらずと信じて之に御すがり申すことでありますされバ此敎の道と云ハゝ神さまを愛し又た世の人々を愛すると云ふ二つの心得まで言ひつくし得まするが更に一言しますれバ基督敎は愛と云ふ心をまさする敎で御座います。といとなめらかに述べ了れり

梅ハ物足らぬやう思ふ節々もあれど心をこめて聽き入るゝときハ何事も悟り易きならひなれバ大に感ずる所ろありけん喜バし氣にまた問ひ尋ねサラバ基督敎と信ずるものハ何故に安心平和を得候やまた女ハ此道を信じ何如なる心得となり候や吾が國にて尙之と信ぜざるもの多きは何ゆゑに候やなどいとこま〳〵と問ひ明らめて心中大に得る所あり此頃來鬱結して解がたかりき思ハおのづから滑が〳〵しく覺えて前日のうらをも無下に卑し

かりそめやう思はれたり實に迷ふかときは見るものとして迷の媒ならぬはあらざるに悟るときは天地の景色一變せりさきに樂としたる者さきに心に望みたる者みな今日の吾心を動すに足らず心念自由と覺えて万事に愉快なること此教を信ぜし人の經驗なるべし凡そ女は貞よしてかつ温和なるをこそ宜しとすれ愼み深うして輕々しき行なきぞ上乘ならん然るに教育を受たる令孃にして反つて斯る淑徳を失ふはたゞ知慧をのみ研きて行を修めさする教のあらざるゆゑならんされとて學校に教ゆる所は西洋文明の學文なり此學文を學ぶものゝ徳を養はんとて因循にして害多き支那の教を教へんとするは倘ほ西洋との競馬する人北馬に大坪流と

仕込むが如し内外甚しき相違あるものと云ふべきなりわれら基督教を信ぜる婦人を見るに其行のしとやかにして夫に仕るの信切なる其心得の愛ふかうして子を養ふのまおゝろなる之を教なきに人に比べて大にまさる所あるは言と待たぞりの孔子の教に育てられたる人々にくらぶるに尙甚しき差あるを覺ゆるなり去れバ此れより娘嬢をよきに導き一生の過なからしめんと思ふ親たちハよろしく此教をきかせて其子の心を定めさすべし今ま梅の失望のあまり偶然に此道に歸依せることとなりたるは其人の爲め尤も喜ぶべきことと云ふべし必竟此れより同人の有樣何如なる幾層の迷ひあまたゝびの悟あることと知るべきなり

因に云ふ。基督教とハ此迄で耶蘇教と云へる教なり耶蘇教の名は從來ハなハだ忌ハしき趣ありて未だ教の主意を知らざる人も其名のみと聽き早くも之を退くる有樣あり近頃ろは世上一汎に之に注意するやうとなりて昔の如き心得の方は漸う少くなるやう見ゆれども尙或ハ斯る教を娘嬢に教ゆ可らずなど思ふ人もありなん此れ尤も愚かしきことなり吾人は道德を脩め品行を硏くに基督教の尤も可なることと信ずるが上よ我國の婦女子と完全に教導するハ特に此教に依らざる可らざると信ぜるものなり讀者乞ふ追々に其理由を說明すると聽き玉へ

● 批評

日本婦人纂論　中本一冊(百九頁)定價二十六錢。

此書は埼玉縣の人井上直女が編纂ありたるものにて(一)我國よは男尊女卑の風習なり(二)男尊女卑の風習破らざる可らぜ(三)日本婦人論(四)女權伸張の方法何如(五)女權伸張の餘論等總て五編あり編々の出處を明記せざると文章よ假名を附せざるとハ二つの憾なれども晩今の女論を合せ觀ふにハ便利あるもれと云ふべし議論の主旨何如んハ批評すべき處掛らざれども素と時事新報毎日新聞の二帋上に掲載したるを其儘に收めたるなれバ茲に之と可否するハすでに時を失ふものなり

● 寄書

〇夏の夜の歌

左は東京獨立新聞の編者イーストレーキ氏より寄送せらる

ワーリントン、イーストレーキ

The Moon is Full, Through Drifts of Cloud
She Sends Her Brilliant Light,
Her Silver Rays Shine Through The Gloom
And make A Day The Night.
I feel Harmonious with The Scene,
But though it is so Sweet,
I Lose the Beauty Of the night—
Musquitoes bite my feet

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社友某右歌れ心をうつもとて口ずさミたるは

名にしおいゞ心して來よおやのむし隈なく照れる月れ光りに

○祝文　東洋英和女學校　片倉綾野

我皇國いこたとせあまり前まではひたぶるに人々たけきをさのミをふのみて萬のをしへたろうかなるなかに手弱女をバむゝよいやしめ道ゝしき教へを施すふとあらさりしが學ひの道ひらゝにひらけすゝみに進みて春の花の雨に綻ひ風にかほるかおとく賤がふせ家にすむをみなこも文よむ道をぞ學ぶなるかしこき御世にうれしくもあふくま川の埋木の春待えたる心地していと辱なく思ふ物からおのれ愚なる身にしあれとうゝる明けき御代に生れなから只よやいやまむとていぬる二月此東洋英和女學校にぞ入り立けるろもこのをしへのよいそんぬる明治十七年十月始めて開校の式を行いれしより御國のわざは云ふも更なり西の國のてぶりに至るまですべて知らすていえあるまじき事をばくまなくをしへ導かせ賜ふによりいまだ二とせならさるに教子の數日に増し月に集ひて今はしも教の場のいとせまうなりにたれバ新に校舍をいとなませ賜ふに至りゝりこれ偏に此校をつかさどらせ賜ふ師の君たちの心盡しのかひになん我等其惠をわそるそ心の駒にむちうちて文の林のしゝきを分け入りつとめいろしミ侍らんと思ふ心を拙き筆よあらはして今日の榮をことほきまつるになん

●寄書●東洋英和女學校內丹野ふさ及片倉綾野兩女より祝文二通、長榮女塾一級生某より一夫一婦の說、イーストレーキ氏の英歌一章、京橋小僧としての夫婦の說等。皆な落手仕候

●新報

○女學演說　去る十七日午后三時より万國婦人禁酒會の書記レビット夫人を聘して木挽町の厚生館內に開きたる女學演說會は意外の盛況にして感謝の至にたへざる者あり當日い傍聽を婦人よのミ限りたれバ來聽の方は多からじと思ひたるに會衆凡ろ六百余名にて館內殆ど充滿したり最初社友小崎弘道君開會の主旨を述べ次にレビット夫人清朗れ音を以て贊美歌一章を唱ひらる斯て通辨い初め横濱フェリス女學校の敎授島田かし子に委賴したるに二三日前來よいかに御恙ありしより同子が敬愛し玉ふ友人にして築地四十二番の新榮女學校を卒業ありたる渡瀨香芽子代つて通弁あり凡ろ一時半ほどの間夫人が滔々の弁と渡瀨子が靜和の譯辭とを以て禁酒、女風、婦女心得の事一汎等を演述ありたり故に演題い過飲及家內諸不德に對する婦人の義務と云へれど及ぶ所ろ甚だ廣かりき吾等男子い開會後席を退きたれバ說話のつゞを細かに承知せざりしが社友林茂淳君其他二名は樓上の一偶に座し速記法にて悉く之を筆記し玉ひたれバ之を次号の誌上に掲載するを得べし斯て四時半過る比ろ演說を終り復び夫人の唱歌ありて一旦會衆を散し有志の婦人三十余名のみ留りて日本婦人禁酒會設立の事を談せられたり」吾人い夫人が熱心

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

道の爲に盡さるゝの風采と持論とを吾同胞の姉妹に示さんと欲し此演說會を開きたるに斯る盛况と好結果とを得て感謝の至にたえざる也故に夫人及渡瀨香芽子を初として當日諸務上の世話を辱なせられたる津田仙小崎弘道兩君に對し謹んで茲に其厚意を拜謝し併て島田子が當日來會あり得玉はざりし遺憾を記す

因に云ふレビット夫人も去廿一日當地を出發して橫濱に至り其翌日大坂西京地方遊說の爲め發程ありたり。又た木村とう鬼頭まその二子を初として十四名の方々は昨日明治女學校に集り日本婦人禁酒會設立の事を共議あり津田仙氏及び余は共に其隣席に臨みたり

○拜謝　橫濱フェリス女學校敎頭ウイン子より惠書ありて本社の志を賞し且つ向後應分の助力を爲さんやう申越され築地四十二番女學校々長リート氏も亦面り同樣の忠言あり華族女學校の敎授津田むめ子より以后女學に關係ある西洋の新聞紙數種を惠送ある旨申通ぜらる依て之を拜謝し且つ讀者に披露す

○束髮とまげ　此頃となりて束髮また大に流行し上流の人々は大抵之を結ふ風となれり現に過る日厚生館にて女學演說を催したる節來聽の方々は大抵中以上の貴婦人ありしに六百人中まげに結はれたるは最と少かりき程なりすべて少のにても改良の運に向ひたる新風俗はいよ〳〵行はらせたきと吾人が常に希望する所なれバ此實に吉報として賀すべきなり又麴町三番町に居留する米人キンスレー氏は丸髷、島田、おさかね、をバこ、いてうがへし五種の附髷を麴町の出雲屋にて求め本國へ送りたるよし吾國のまげは文明國に見せ物となる程に奇体のものなるよしを之によりて知るべし

○東洋英和女學校　麻布東鳥居坂町の同學校は去十七年十月中初て開設ありたる者なれども生徒の數日に增加し校舍の狹隘となりしかば昨年夏季休業中增築せしも本年は又々手狹を覺ゆるに付き此頃更に數棟の增築あるよし廣告に見ゆる如し

○中島とし子　は賢夫中島信行氏と共に去十八日耶蘇敎の洗禮をムーア敎師より受け信徒となられたり

○明治女學校　は去九日より十五日まで定期大試驗あり十四日にも生徒久野竹下兩子の英語演說あり小崎弘道君の講談もありたるよし弊社の木村祐吉も參り合せたり

○婦人慈善會　の委員長も伊藤總理大臣夫人梅子が辭したるに付井上外務大臣夫人武子が同會員一同の指名に依り後任を襲ぐとを承諾したるよし尙同會にて皇后宮を同會の會頭に推奉したきやう願ひ奉られたる願書を次号に揭ぐべし

○茶話會延期　米國公使の夫人等の發起に係る内外貴夫人の茶話會ハ盛暑に際したるを以て來る九月三十日迄休會したるよし

○高等女學校　にて去十三日十一名の卒業生徒あり文部省の靑木氏及外山正一君の演説あり松原いく君ハ卒業生徒總代として謝辞を述べられたり

○看護婦改良　有志共立東京病院に於てハ我邦の看病一般に係る容易の科程を設けて各志願者を教育養成せられ殊に米國女教師ミスリードを聘し看護婦教育所長とし英語其他有志共立病院の醫員をして生理藥物等の科目を教授せらるゝよしにて目下看護婦及び同生徒を募集中なりと云ふ（七月十五日報知新聞）

○京都婦人集談會　上下京區居住華族の令孃官吏の娘其他女教員の催しにて今度婦人集談會と云ふを起し醫學士及び諸學士を聘し育兒家事經濟等其他婦人に緊要なる事柄を研窮せる趣にて目下會場及び會日等を協議中也と云へり（七月廿二日中外電報）

○大坂裁縫學校　大坂西區新町の裁縫學校ハ藝娼妓に裁縫を教ゆる所なるが昨年ハ登校する者日に五六十名なりしに昨今ハ毎日七八十名あるよし一ツハ不景氣の爲なれども又喜ぶべきと也

○娼妓共へ達　新潟西堀前通五番町の貸座敷にてハ毎日夕刻に娼妓どもの化粧せるに裸体にして店頭に出居るも醜狀にして見苦しきの至なれども以後斯の如き場合にも必ず簾をかけて其醜狀を現さゞるやう注意せよと警察署より達せられし趣七月廿一日の新潟新聞に見ゆ

○尾張の女學校　名古屋の女學校も縣令及有志者の盡力に係らず縣會にて遂に廢滅に決したるよし尤も慨歎すべきとなり

○唱歌傳習會　西京の各小學校中有志の女教員發起にて暑中休暇を好機とし小學唱歌の普及を謀らん爲め下京三組明倫校を借用し唱歌專門教師一名を聘して去十九日より唱歌傳習會と云ふを開かれたるよし（七月十八日中外電報）

○女教師招聘　宮城縣にても此程養蚕會社を創立し群馬縣より女教師十四名を雇入れ有志の者には養蚕製糸の方法を教授せらるゝと云ふ（七月十六日朝野新聞）

○女學士　この程米國コロムビヤの大學校ニ於て數十名の卒業生ありたる中一名の婦人ありて學士の學位を得たりとの婦人は年齡二十四にして名をウヰンニフレド、ハーリング、エギルトンと云ひ此の學校にて婦人にて學位を得たるハこの人が始めてなりといふ

○クリヴランド氏の婚後の月　米國大頭領クリヴランド氏が其の新婦と共に婚後の月（Honeymoon）を過ごすべしと聞へしデー

ヤ、パークといへるはマリー、ランド川中にて風景最も絶美にして海面を拔くこと二千七百ヒート高き高燥の土地なり新郎新婦兩人の宿所と定めたるハ第二號と稱する孤亭なるがその造搆ハいかにも簡畧にして四面にハ椽を環らし食堂ハ後の方にあるが別に廚とてハなく三度の食事ハ近傍の料理店より仕出す事なり此の地ハ毎年六月十五日後にあらざれバ人の登臨を許さゞる定めなれバこの亭の番人の外別に住ふ人もなしクリヴランド氏の跡を追ふて其翌朝茲に到着したるは前元老院議官ダビース氏及妻子其他數名にして何れも別懇の人々なるべし新郎新婦ハこの地滯留中家にある時は相對して書を讀み骨牌を鬪ハし倦めバ則ち相携へて近郊を散歩し時として船を山間の溪流に浮べて釣魚の樂に日を消し時としてハ馬を數里の郊外に驅りて野花の香バしきを探ぐるなど茲に人生最上の愉快なる月を送りしが既に日數も六七日となれバ如何にせん其の樂ハ未だ盡きざるも政治上の係累は氏を風塵の外に遺るを許さずよつて氏ハ六月の八日を以て婦人と共に華盛頓の官邸に歸りたりと（七月十四日時事新報に見ゆ）

○三國の婦人　この頃佛京巴里のナックといへる人が獨、英、佛三國の婦人の容貌性質好尚等を評したるを聞くに獨逸の女は顏四角に、頰骨太く、頸肥り、肩廣く、歯も出で、皮膚ハ微紅に、眼ハ綠に、指ハ細し往々美人なきにあらざれども兎角濃艶重厚の態に富みて楚々人を動かすの趣きに乏し匂なきの花、花なきの實とは下し得て適當の評ならんか英國の女ハ獨逸の美には稍や劣る所なきにあらざれども美術上の美を專有し形の美くしきよりハ寧ろ氣高き風韻に富めりされどその心も非常に偏屈にして殊に宗教の熱心烈しく滿胸宗教を以て塡充し他に一物を容るゝ能ハざる又家系血統などの事に就ても中々喧しきを常とせり獨逸の女ハこれに比ぶれバその心頗る胖のにして宗教の事にても社會の事にても左程に狹き料見を有せず且つ獨逸の女は一家の細君に適當の性質を有し自ら髮を結び如何なる物にてもなる丈有用の事に使用して無駄なさず下婢と共に箒を以て席を掃ひ敢て之を恥となさゞるの風あり之に反して佛國の婦人ハ所謂巴里育ちにして其容貌態姿ともに人造天工の美を盡し一たび宴會の席に出づれバ滿堂の紳士を惱殺するに足れりされどもろの裝飾ハ餘り華美に過きて却て風采を損する事なきにあらず衣服を着るよりは寧ろ衣服を飾るものといふべし佛國の婦女の畢生の心事も唯華美なる衣服を得て交際社會を壓倒せんとするの外なきものゝ如し云々（七月廿日時事新報）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○歐洲の神無月　歐洲にては昔の羅馬時代より年の五月に婚姻する事を忌むの慣習あり俗傳によるに一年十二箇月も夫々の神ありて之を守れるに五月を守る神はヨナルバと名くる嫉妬深き獨身の神なるを以てこの月に婚姻する人は神の惡みを受けて災を蒙るとの事より五月には婚姻を忌む事となりたるなりと然るに歐洲の歷史上に尤も不幸の話を留めたるジャン　グレー女蘇格蘭の女王マーリー　マリー　アントイネット　カロリン女王等は何れも年の五月に婚姻したるの事實あるより俗間にては益々の慣習を固守する樣になりしといふ我國の神無月と一幅對の話といふべし（七月廿四日時事新報）

○教部彙報　天童教會の門池のゑ築地女學校の伍藤とゑ兩子は六十日間天童に傳道さる。靜岡のメソヂスト教會婦人會よりコレラ病の防ぎ方と云へるを印刷し廣く配布さる。パンペテン女教師は彌薾天童に傳道さる。府下日本橋教會の姉妹は去十三日より編物の稽古所を吳服町に設け每金曜日の夜七時より女教師二名出張し之を教えられ終りてのち教話ある由。岡山のタルカツ女教師及び加藤峯女は去月鳥取津山等に傳道さる。京都婦人愛憐會は本月十五日より九月十五日まで暑中休業さる。

●各教會の姉妹諸子は向後右項に對して新報を惠送ありたし

●正誤　本誌第二十七号紙末女學校集報中新榮女學校に關する條を左の如く正誤す

新榮女學校	築地新榮町四十二番	校長○リナリート○教師○ロース○リート　本邦教師○佐伯陽一、菊地むつ、井石ちよ、高橋うめ、馬場もと○高津柏樹（和歌）荒井桐月（習字）小島さき（裁縫）伊勢たま（女禮、幹事）木村よし（小學教員）	八十三名	本年英學科卒業三名

廣告

女生徒募集廣告

當校生徒欠員に付**十名限り募集**候間十才以上にして志願の方は來る**八月二十五日迄**に申込あれ

但　秋期入學試驗は來る九月一日二日を以て執行す規則書一覽御望の方へは回送すべし

横濱山手百七十八番　**フエスリ英和女學校**

●本校前きに大に校舍を增築したるも猶未た來學貴女の望に應ずる能はざ依て本年暑中休暇を機とし復た教場寄宿舍を增築し來九月十日より更に寄宿生百名通學生五十名入學を許す寄宿生中其望に依り西洋室内の整理衣服飲食製裁賓客の待遇其外西洋風習の實務を修業せしむ但規則書御望の方は郵稅二錢御遣しあるべし

麻布東鳥居坂町　**東洋英和學校**

中外兵談

一冊正價現金十錢　每月二回發行　八月一日第一号發行

●この雜誌は兵事に關する論說、雜報、談話、又は海外新聞雜誌の新說奇論、軍人の小傳、支那語學獨習法、內外人の詩歌格言、其他兵事一切の事項を記載したる者なり

●第一號幷に第二第三号は海陸軍の將校、各鎭臺の隊々、各地方の中小學校、各府縣廳の兵事課、學務課全國の郡區役所等へ見本として遞送するに付多分に印刷いたし候間當日の刊行の中外兵談に廣告するときは琉球の南より北海道の北に到るまで殘る隈なく相とゞき申すべし

東京本郷弓町一丁目廿一番地　**中外兵談社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

學藝雜誌

八月五日第一號發兌
毎月〔五日〕二十日〕二回刊行
一册正價〔遞送無料〕金八錢

●前金の外遞送せざ●郵劵代用の向ハ遞送費御自辨●見本一部は一錢切手八枚にて遞送を●割引半年分十二册〔前金九拾錢●一年分〔二十四册〕全壹圓六拾八錢●二年分〔四十八册〕全三圓十二錢●賣捌と望む向は特別割引すべし

本誌ハ專ら學藝教育に係る理論、應用及實驗の說を掲ぐ其科目と●心理●論理●教育●倫理●法律●法律●政治●史傳●地理●天文●博物●理化●算數●農商工●生理●健全●製造●圖畫●小說●記行●簿記●速記●演說●體操●文法●修辭●經濟●統計●音樂●詩學●舞樂等にして其編輯の部門と雜錄、雜纂、雜報の三に大別し其說の最も精練なる者、其事の最も新奇なる者、其實驗の最も正確にして智識開發に益ある者を撰擇登載す●本誌を購讀する者ハ坐して良師に接し其教を受け、益友ヨ會して其教を聞き、圖書庫中に入りて古今有益の書を繙き、廣く內外の學藝に關する新聞雜誌を一室に集めて之を通覽し又躬ら各地を巡歷し親しく學事の景況を目擊するが如し●本社ハ別に教育雜誌なる者を發行して大に江湖の喝采を博し現今已に（第十號）に達したり

學藝雜誌
教育雜誌
發行所 東京淺草區御藏前南元町二十四番地 賛育社

演說着作材料新誌

第六號發兌

●耐罰 文章の本位○學海珠玉 禁酒格言集、少年の事業、食物の害毒、孔教の女道 困學の人々、才子の短命、大人の出處●文檀一枝○教育の目的、國語の變遷、最大幸福論、終極の目的、政黨の利益、古言及輿論、帝室及政府、其他十五條、西洋名言九、支那格言八●人事瑣談○兩賢相と辞、卞和玉に哭 粃粟を易ゆ、孔子憂歎す、子と喪の歎、誕生と命日、事實の異解、孔子に哀公、古代の質素、近松の筆才、推致堂隨筆●名章華言○十六條、杞憂、屠龍、夢鹿、雛字の和解六●雜錄談話○萬國の帝王、金銀の產出、麥及酒消費、教科用書目●日本古人壽數表と附錄す●●●一册十錢○全國無遞送料○半年前金五十五錢○見本ハ郵劵十錢送らるれバ直ちに呈送すべし

東京本鄕弓町一丁目廿番地 女學雜誌社

定價

一册	五錢	郵税一錢	（但府內無郵税）
十册	四十八錢	郵税十錢	（同前）
廿册	九十錢	郵税廿錢	（同前）
卅册	一圓卅錢	郵税卅錢	（同前）

一ヶ月分女學雜誌代價	十五錢	府外ハ十八錢
二ヶ月分同	三十錢	府外ハ三十六錢
三ヶ月分同	四十五錢	府外ハ五十四錢
半年分同	八十八錢	府外ハ一圓六錢
一年分同	一圓六十錢	府外ハ一圓九十六錢

廣告

一行	一回（廿八字詰）	前金拾錢
同	三同以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引二十行以上二割引四十行以上三割引
但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評そ

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌） 巖々堂
東京神田區雉子町 閻々社支店
同 神田區佐柄木町 東海堂
同 日本橋區新葭町 良明堂
同 日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同 京橋區木挽町壹丁目 萬字堂
同 本鄕區元富士町 盛春堂
同 本鄕區春木町二丁目 解明堂
同 牛込區肴町 活神堂
大坂備後町四丁目 岡島支店
伊勢國松坂白粉町 家里初枝
東京芝西久保櫻川町（支局） 萬春堂

發行所
本局 東京本鄕區弓町壹丁目廿番地 女學雜誌社
持主兼編輯人 巖本善治
印刷人 森田豐

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

一冊正價（郵送無料）金八錢

●前金の外郵送せず●郵劵代用の向は郵送費御自辨●見本一部は一錢切手八枚にて郵送す●割引半年分十二冊前金九拾錢●一年分二十四冊全壹圓六拾八錢●二年分四十八冊全三圓十二錢●賣捌と望む向は特別割引すべし

本誌は專ら學藝教育に係る理論、應用及實驗の說を掲ぐ其科目と●心理●論理●教育●倫理●法律●法律●政治●史傳●地理●天文●博物●理化●算數●農商工●生理●健全●製造●圖書●小說●記行●簿記●速記●演說●體操●文法●修辭●經濟●統計●音樂●詩學●舞樂等にして其編輯の部門と雜錄、雜纂、雜報の三に大別し其說の最も精練なる者、其事の最も新奇なる者、其實驗の最も正確にして智識開發に益ある者を撰擇登載す●本誌を購讀する者は坐して良師に接し其教を受け、益友と會して其教を聞き、圖書庫中に入りて古今有益の書を繙き、廣く內外の學藝に關する新聞雜誌を一室に集めて之を通覽し又躬ら各地を巡歷し親しく學事の景況を目擊するが如し●本社は別に教育雜誌なる者を發行して大に江湖の喝采を博し現今已に（第十號）に達したり

學藝雜誌
教育雜誌
發行所
東京淺草區御藏前南元町二十四番地
賛育社

演說
著作
材料新誌

第六號發

●耐忍、文章の本位○學海珠玉、禁酒格言集、少年の事業、食物の害毒、孔教の女道、困學の人々、才子の短命、大人の出處●文檀一枝○教育の目的、國語の變遷、最大幸福論、終極の目的、政黨の利益、古言及輿論、帝室及政府、其他十五條、西洋名言九、支那格言八●人事瑣談○兩賢相と辞、卞和玉に哭、粃粟を易ゆ、孔子憂歎す、子と喪の歎、誕生と命日、事實の異解、孔子に哀公、古代の質素、近松の筆才、推致堂隨筆●名章華言○十六條、杞憂、屠龍、夢鹿、難字の和解六●雜錄談話○萬國の帝王、金銀の產出、麥及酒消費、教科用書目●日本古人壽數表と附錄す●●●一冊十錢。全國無遞送料○半年前金五十五錢○見本は郵劵十錢送らるれバ直ちに呈送すべし

東京本鄕弓町一丁目廿番地
女學雜誌社

定價

一ヶ月分女學雜誌代價	十五錢	府外ハ十八錢
二ヶ月分同	三十錢	府外ハ三十六錢
三ヶ月分同	四十五錢	府外ハ五十四錢
半年分同	八十八錢	府外ハ一圓六錢
一年分同	一圓六十錢	府外ハ一圓九十六錢

卅冊。一圓卅錢郵稅。卅錢（同前）
廿冊。九十錢郵稅。廿錢（同前）

廣告

一行一回	（廿八字詰）	前金拾錢
同三同以上		一割引
同六回以上		二割引

十行以上一割引二十行以上二割引四十行以上三割引
但し不道德なる事物の廣告も謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送と乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評を

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌）巖々堂
東京神田區雉子町 闘々社支店
同 神田區佐柄木町 東海堂
同 日本橋區新葭町 良明堂
同 日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同 京橋區木挽町壹丁目 萬字堂
同 本鄕區元富士町 盛春堂
同 本鄕區春木町二丁目 解明堂
同 牛込區肴町 活神堂
大坂備後町四丁目 岡島支店
伊勢國松坂白粉町 家里初枝
東京芝西久保櫻川町（支局）萬春堂

發行所
本局 東京本鄕區弓町壹丁目廿番地
女學雜誌社
持主兼編輯人 巖本善治
印刷人 森田豊